

うしろをふり向くことなく

コルマルからミュンスターまで行くというバスの運転手は、私どもをギュンスバッハの村の中央を少しはずれた「シュワイツァー館」の前でおろしてくれた。電話で約束したちょうど5時、建物をはう蔭の中にかくれているベルの把手を引くと、扉があいて私どもを迎え入れて下さったのが、初めてお目にかかるアリさんであった。その時から、私ども夫婦は「ドクター・ノムラズ・グレート・フレンズ」（アリさんの言葉）として、家族の一員のようなあたたかいおもてなしに与った。1974年夏のことである。

ゲストハウス「アケワ」に泊っていた総勢8人程の来客みながそろった日曜日の夕食後、アリさんがいれて下さったランバレネ風というミント・ティーとクッキーをいただきながら、くつろいだ一と時を持った。とびかういろいろな言葉にとまどう私どものために、アリさんが「共通語は英語で」と提案して下さり、話は次第に深刻な話題へと移っていった。日本人は珍しいのであろう、質問が私に集中した。

「日本はアメリカに負けたのに、どうしてアメリカ一辺倒なのか」と、若いフランスの女性教師。一方、これまた高校の歴史教師だというオランダの年輩の婦人は「私たちはいまもナチを憎む。戦争指導者たちを許している日本人の寛容は私たちには不可解だ」と、私に説明を追った。

これに答えるには、歴史意識の稀薄な私ども日本人の心性や、「行雲流水」の日本文化にまで語り及ばねばならないだろう。拙い英語でそのことに苦闘している私に、アリさんが「私たちは時に過去を忘れることも、人を許すことも必要なのではないか」と、助け舟を出して下さったのを忘れることができない。聞けば、アリさんは戦争中オランダの病院船に乗っていて、その経験から日本人には決して良い感情はもっておられなかったのだという（高橋功氏による）。



その年の秋、台湾で開催された「アジア地域シンポジウム」に参加された帰途日本に立寄られ、思いがけずもう一度お会いする機会に恵まれた。一週間足らずの日程はまたたく間に終って、私どもは野村先生ご夫妻と森元さんにご一緒して、アリさんを成田に見送った。

搭乗時間になると、アリさんは私たちに最後の挨拶をされるや、一度もふ

りかえることなく入口のかけに消えて行かれた。日本人なら何度もふり向いて手をふったりするところなので、その後姿は実に印象的だった。

いまとなれば、それが私どもにとって此の世で見たアリさんの最後の姿となった。



(成田空港にて)

二度しかお目にかかったことがない私に、アリさんを語

ることはできない。だがあの毅然とした後姿は、強い意志力を秘めながらも人を包みこむような深さをたたえた美しい双の眼とともに、私の脳裏に焼きついている。それは、博士に終生変らぬ敬愛をささげ、「生命の畏敬」に生きぬいたアリさんの生そのものを鮮やかに映し出しているように思えるのである。「生命はうしろへ退くことなく、いつまでも昨日のところに、うろろう、ぐずぐずしてはいないのだ」(カレル・ジブラン、神谷美恵子訳)から。

○

以来何通かいただいたアリさんの手紙は、質素な紙にシュワイツァーそっくりだという美しい字で善かれ、いつも「アリ・サン」と署名されていた。最も心に残った一通をご紹介します、アリさんを偲ぶよすがにしよう。

「あなたのお手紙から、この前の戦争のあと、あなたの国人たちが戦争を永久に放棄したこと、そしてそれは世界中の国々にとって一つの模範であったということを思い起しました。私たちはそのような重大な決心でさえも、いとも簡単に忘れてしまう。いったいどうしたことなのでしょう。多分私たちは精神的にというより、むしろ道徳的に卑屈になってしまっているのでしょう。これは西欧でも全く同じです。この病の原因は、宗教や哲学ももはや人々の精神や道徳に大した影響を与え得なくなっていることにある、と私は思います。物質的なものの考え方は決して人を謙遜にしません。物質的世界の空虚と、威信と権力への渴望は、老若いずれにとっても恐るべきものです。

「しかし—— 私たちには2千年前の偉大な使信があります。私たち

はみな黙して、これを聞かねばなりません。そして、それについてよく考え、黙想し、その示す道を歩まねばなりません。本当に「平和をつくり出す人たちはさいわい」です。日々の生活において、毎日を良い意図をもって新しく始めたいと思います。私たちの弱さが許されて、そうできるよう心から願うものです。

「新しい年を通して、そしていつまでも、私たちの間に平和への熱望がありますように祈ります。この深い希求において、私はあなたがたや、その他のすべての友人たちに近くあると感じています。互に励ましあい、相違の中の一致において互に強くありましょう。」

(1982年12月)

(所載)

『ランバレネ』第102号

シュワイツァー日本友の会

1987年9月